

Arthuriana Japonica: Newsletter No. 30

October 2017

国際アーサー王学会日本支部会報 Société Internationale Arthurienne Section Japonaise

目次

I. 2016年度年次大会報告	1
年次大会プログラム	1
総会議事録	2
シンポジウム発表要旨	4
研究発表要旨	7
II. ヴェルツブルク国際大会報告	8
III. 電子化について	11
IV. メーリングリストについて	11
V. 会計からのお願い	11
VI. 学会サイトについて	12
VII. 2017年度年次大会について	12
VIII. 研究発表・シンポジウム企画募集	12
IX. 会員名簿に関するお願い	12
X. 文献情報	12
英文学	12
独文学	15
北欧文学	16
仏文学	16
中世ラテン語文学・伊文学・西文学	17

I. 2016年度年次大会報告

日本支部の2016年度年次大会は、下記の通り滞りなく開催されました。ご参加いただいた皆様、開催校高名康文先生に厚く御礼申し上げます。

[日時] 2016年12月17日(土) 午後13時より

[場所] 成城大学(3号館 311教室)

[大会費] 1,000円(会員のみ/学生無料)

[懇親会費] 1,500円(学生800円)

年次大会プログラム

*開会(13:00)

*開会の辞 支部長 不破有理(慶應義塾大学)

*開催校ご挨拶 高名康文(成城大学)

*第1部: シンポジウム(13:10~)

「中世の俗語文学における「誠実」概念の宗教性について」司会・序論 嶋崎啓(東北大学)

「Treueという語がキリスト教から受けた影響について」嶋崎啓(東北大学)

「『ニーベルンゲンの歌』の「不誠実」の宗教的側面について」渡邊徳明(日本大学)

「「存在するもの」は作品で語られるか?—「滑稽なレー」における「忠実」を巡る語の使用例」高名康文(成城大学)

「アーサー王宮廷の騎士と聖杯王パルチヴァール—共同体と誠実について」松原文(東京大学大学院博士課程、日本学術振興会特別研究員)

「ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの「誠実」にみられる宗教性について」

伊藤亮平(松山大学)

*第2部: 研究発表(15:30~)

司会: 田中一嘉(成蹊大学)

「ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ『パルツィヴァール』中における他作品への言及箇所について」青木三陽(京都大学非常勤講師)

司会: 高名康文(成城大学)

「頭韻詩『アーサーの死』とルナールの息子」

不破有理(慶應義塾大学)

「『アーサーの死』と『狐物語』」

コメンテーター: 福本直之

*会員研究動向・情報交換フォーラム (17:20～)

(1) 他学会シンポジウムのご紹介:

国際シンポジウム「中世における文化交流—対話から文化の生成へ—」(田辺めぐみ先生)

西洋中世学会シンポジウム「映像化される中世」
(小宮真樹子先生)

(2) 新稿・新刊情報のご紹介:

“Behind the Scenes of Vinaver's Works of Sir Thomas Malory,” *Journal of the International Arthurian Society* Vol. 4, Issue 1(2016): 135-156. (高宮利行先生)

『アーサー王伝説—19世紀初期物語集成—』Eureka Press, c/o Edition Synapse, 2017年。「Does Format Matter?—トマス・マロリー『アーサー王の死』1816年版 Walker edition の判型を解説する」慶應義塾大学日吉紀要英語英文学 No.68(平成28年10月):1-24. (不破有理先生)

*支部総会 (17:30～)

*閉会の辞 (17:50～) 副支部長 篠田勝英 (白百合女子大学)

*懇親会 (18:00～) 7号館B1階「学生ラウンジ」

2016年度年次大会も、会員・非会員の皆さまに多数ご参加・ご協力いただき、無事に開催することができました。心より御礼申し上げます。また当日の運営には成城大学の高名康文先生のご尽力のもと、同大学院生の小倉奈緒美さんと河合優利佳さんにご協力いただきました。懇親会につきましても、破格の会費で盛会に開催することができました。厚く御礼申し上げます。ご参加・ご協力いただいた皆さまに感謝申し上げます。(新居明子)

総会議事録

*報告事項

(1) 役員交替のお知らせ

以下2名の幹事の交替についての報告があった。また、渡邊先生による伊藤先生の紹介の後、伊藤先生よりごあいさついただいた。

庶務 旧: 徳永聡子 (慶應義塾大学)

新: 新居明子 (名古屋外国語大学)

英文書誌と兼務)

英文書誌 旧: 渡邊徳明 (日本大学)

新: 伊藤亮平 (松山大学)

(2) 2016年の活動について

年次大会の応募要項について、従来どおり申し込みの締切は、シンポジウムが2016年7月31日、研究発表が8月31日、応募方法はメールまたは郵送にて、また応募先は直接庶務担当者という報告があった。

電子化については、郵送希望をお知らせいただいた会員以外は、次期役員体制となる2018年2月を目途に、紙媒体ではなく電子媒体にて文書を配信する方向で準備をすすめているという報告があった。(庶務: 新居明子)

(3) 学会サイト「アーサー王伝説解説」について

「魔法使いマーリン」(田中ちよ子)、「ジェフリー・オブ・モンマス」(森ユキエ)、「中英語アーサー王ロマンス『ガウェイン卿と緑の騎士』」(岡本広毅)の3本の記事がアップされ、ツイッター情報も随時更新されているという報告があった。

今後の検討課題として、解説記事執筆者が少ないこと、査読者の確保が困難であること、Web委員の交替を視野に入れる必要があること等があげられた。(Web委員会: 細川哲士・小宮真樹子)

(4) 書誌活動報告

BIAS 67号の校正が終了し、68号の書誌情報を本部に送付済みであること、2016年度Newsletter用の書誌情報に関する作業終了について報告があった。また、過去のBIASについては、66号までは国際学会HPのメンバーサイトから閲覧可能であるむね、告知があった。(書誌: 高名康文)

(5) 2017年度年次大会について

開催日: 2017年12月9日(土)

会場: 白百合女子大学

(6) 2017年国際ドイツ大会について

2017年7月23日～29日 @Würzburg (独)

*審議事項

(1) 2016年度決算報告 (2015年12月2日～2016年11月30日)

会計担当幹事の田中一嘉先生より会計収支決算が報告され、会員の承認を受けた。

収入

項目	収入額
年会費 (47 件)	174,000
寄付金 (1 件)	10,000
入会金 (2 件)	6,000
小計	190,000
【支部大会関連収入】	
大会参加費	27,000
懇親会費	147,000
書店出展料	10,000
小計	184,000
2015 年度からの繰越金	862,604
普通預金口座利子	85
総計	1,236,689

支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費	169,258
ホームページ関連費用	6,631
事務用品代・雑費	8,815
通信費	39,929
振込手数料	3,062
小計	227,695
【支部大会経費】	
学生アルバイト代	10,000
懇親会費用	120,000
事務用品代・雑費	18,521
小計	148,521
2017 年度への繰越金	860,473
総計	1,236,689

(2) 2017年度予算案提出 (2016年12月1日～2017年11月30日)

続いて2017年度予算案が提出され、会員の承認を受けた。

収入

項目	収入額
年会費(会員数 90 名@3,000 円)	270,000
寄付金	10,000
入会金	9,000
小計	289,000
【支部大会関連収入】	
大会参加費	30,000
懇親会費 (成城大学より補助金含む)	170,000
書店出展料	10,000
小計	210,000
2016 年度からの繰越金	860,473
普通預金口座利子	100
総計	1,359,573

支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費	200,000
ホームページ関連費用	9,000
事務用品代・雑費	25,000
通信費	50,000
振込手数料	5,000
小計	289,000
【支部大会経費】	
学生アルバイト代	10,000
懇親会費用	170,000
事務用品代・雑費	30,000
小計	210,000
2018 年度への繰越金	860,573
総計	1,359,573

(3) 新入会者承認について

以下1名の入会希望者が高名康文先生より紹介され、入会が承認された。

佐藤ヴェスイエール・吾郎ジョルジュ氏 (推薦者: 瀬戸直彦・高名康文)

(4) 賛助会員制度の新設について

書店に賛助会員として入会してもらい、賛助会員は年会費5,000円（一般会員3,000円）を納めるかわりに、これまでの年次大会出店料10,000円を無料とし、学会サイト上に書店ホームページへのリンク掲載を認めることが提議され、会員の承認を受けた。（会長：不破有理）

シンポジウム発表要旨

「中世の俗語文学における「誠実」概念の宗教性について」
司会・序論 嶋崎啓

ドイツの宮廷騎士文学で理念として称揚される「誠実」は、フランスのそれよりもその理念に宗教的な意味が強く込められているように見える。歴史家のガンスホーフによれば、封建制度の「誠実」は「相手に害を与えない」を意味し、「～しない」というネガティブな意味が基本であった。「誠実」は確かに、それがなければ封建制度が成り立たない重要なものであったが、あくまで封と奉仕のギブアンドテイクの前提であって、奉仕そのものではなかった。しかし、ドイツ文学における「誠実」には、単にネガティブなだけではない、もっと積極的な意味が込められているように思われる。ドイツのミンネザングにおける「高きミンネ」に現れる「誠実」は「奉仕」という能動的でポジティブな行為と連動しており、貴婦人を神聖視して行われる絶対的な「奉仕」は宗教的な信仰への接近を感じさせる。本シンポジウムでは、『ニーベルンゲンの歌』、『パルチヴァール』、『トリスタンとイゾルデ』やヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデおよび他のミンネ・ゼンガーにおける「誠実」を考察し、ドイツの「誠実」が人間間の俗なる「誠実」から発しながら絶えず聖なるものへの希求やキリスト教的理念につながっていたという、聖と俗の間で揺れ動く理念であったことが論じられた。それに対し、『ペルスヴァール』と『マントのレー』の「誠実」によって、フランスの「誠実」は語るべき時には語られず、語られる時には皮肉として持ち出されるということが明らかになった。このある種の矛

盾はエスプリの精神によるもののようにも思われる。そうだとすると、ドイツ的な生真面目さとフランス的な遊戯性という違いが「誠実」の現れ方にも反映していると言えるかもしれない。

①「Treueという語がキリスト教から受けた影響について」
嶋崎啓

「誠実」を意味するドイツ語のTreueは、語源において「木」を意味し（英語のtree）、そこから「まっすぐで裏切らない」という意味が生じたと言われる。しかし、実際のドイツ語の文献に残るこの語が「木」を意味することはない。古高ドイツ語に現れるtriuwaは基本的にラテン語のfidesの訳語として用いられて「信仰」を意味した。その後の中高ドイツ語のtriuweは「信義」、「誓約」、「忠実」など多様な意味を表したが、それは広い意味での「誠意」であった。『ニーベルンゲンの歌』に現れるtriuweは宗教的な「信仰」の意味を表さず、もっぱら人間間の「誠意」を表す。その際、日本語の「忠誠」や「忠実」などの語が含意する「下の身分の者から上の身分の者へ」の「誠意」に限定されず、「上の身分の者から下の身分の者へ」の「誠意」も表された。一方、ゴットフリートの『トリスタン』におけるtriuweも宗教的な意味を表さないが、「恋愛」を意味する場合と（多くは同性間の）主従関係における「誠実」を表す場合の二つに分かれる。『トリスタン』でtriuweが「恋愛」を表す場合、語り手による恋愛論の中で言及される場合がほとんどである。それに対し、具体的な場面描写や、登場人物の発言の中で用いられるtriuweは「上から下へ」を含む主従関係における「誠意」を表す。「恋愛」のtriuweは「理念」として抽象化されており、一見すると宗教的な意味を表さないが、「神聖」なものへの崇拜として宗教的なニュアンスを帯びていると言えよう。それに対し、「上から下へ」を含む主従関係におけるtriuweは、当時の現実社会を反映したものと考えられる。「恋愛」を意味するtriuweが「理念」として高められ、「神聖」なものとして崇められるところには、かつて古高

ドイツ語で *triuwa* がキリスト教の「信仰」を意味するものとして用いられたことが影響を与えたと考えられる。

② 「『ニーベルンゲンの歌』の「不誠実」の宗教的側面について」 渡邊徳明

嶋崎氏の第 1 報告により、『ニーベルンゲンの歌』の *triuwe* (= *getriuwe*, 誠実) には宗教的なニュアンスが含まれないことが明らかにされた。たしかに、個々の場面での *triuwe* を語義的に理解するとき、そのような結論は妥当であろう。

ところが、そのテキストが実際に中世の人々の間で受容された際に、宗教的なニュアンスを帯びて理解されたという可能性はむしろ高いと渡邊は考える。実際、この叙事詩の続編とされる『哀歌』や、この叙事詩のパロディーとして知られる『ヴォルムスの薔薇園』においては、主人公クリエムヒルトの信義の有無がテーマ化されているとして先行研究においても関心を示されてきた。その際に背景として、文学受容者の間におけるクリエムヒルトに対する敵意の広まりが想定されていた。

しかし、この第 2 報告においては、むしろ中世思想全般に大きな影響を与えたアウグスティヌスおよびアンセルムスによる神学的な議論を踏まえ、それらの予備知識を頼りに受容者がどのように登場人物たちの *triuwe* や *untruwe* (= *ungetriuwe*, 不誠実) を意味づけすることができたのであろうか、ということ考察した。その際にとりわけ、*triuwe* の否定概念である *untruwe* に関して、単に人と人の中での不義理といったレベルではない、宗教的な否定ニュアンスの存在、すなわち背徳的なニュアンスを強調した。

このような宗教的な意味づけを付与された誠実・不誠実にまつわる問題意識が文学作品内に取り込まれる具体的なきっかけとなり得たのが、数十年前に書かれたとされる、異教徒との戦いをテーマとする『ローラントの歌』であったのだ、と本報告では前提とされた。この叙事詩の影響を通じて、『ニーベルンゲンの歌』の中にもキリスト教的な意味での誠実・不誠実についての問題意識

が取り込まれたのではないか、すなわち前者の *ungetriuwe* (不誠実) に含まれる宗教的含意(背教的罪悪のニュアンス)が、後者のそれにも引きつがれているのではないか、ということについて論じた。

③ 「「存在するもの」は作品で語られるか? — 「滑稽なレー」における「忠実」を巡る語の使用例」 高名康文

「誠実」を言い表す古仏語の単語に、*foi* がある。独文学会におけるシンポジウム「聖と俗の *foi* & *triuwe* — 中世の宮廷文学における「誠実」・「忠誠」・「信心」」において、私は『ロランの歌』におけるこの語の出現例は 4000 行中で 10 例に留まる上に、*par feid* というような定型的表現がほとんどなこと、さらに、シャルルマーニュの十二臣将が主君と神への誠実にかけてマルシル王との戦っている場面においては、一回もこの語が出現しないことを指摘した。その代わりに多用されるのが、人との紐帯を欠いて共同体の外にいる状態を表す形容詞の *fel* である。歴史家ガンスホーフによると、*foi* は誠実誓約を破らないことによって、人の紐帯につながっているという状態を広く言い表す言葉だった。そのため本来の意味を薄めて慣用的な表現で使用されるようになり、誠実を言い表すには紐帯から外れない、裏切らないという否定的な言い回しが使われるようになったのだろう。

クレチアン・ド・トロワのテキストにおいては、人対人の誠意は *l'ëauté* という語で語られる。しかし、『ペルスヴァル』でのこの語の登場回数は、9000 行中に派生語も別の意味で使われているものもあわせて 9 回である。一方、中高ドイツ語の『パルツィヴァール』で *triuwe* についてのディスカールが 250 回程度展開される。『ペルスヴァール』にしても、誠実は作品にとって重要な概念であったに違いないが、敢えて語られることはなく、中高ドイツ語に翻案される際、この概念が前面に出されたのだろう。

これに対して、男女間の誠実さについて疑念を呈するアーサー王世界の二次創作的な作品『マン

トのレー』では、1000行弱の中に14回もの *læute* の用例がある。古伝語の作品では、存在する誠実 は敢えて語られず、存在しないと考えられている 場合にこそ語られているということなのだろうか。

④「アーサー王宮廷の騎士と聖杯王パルチヴァール— 共同体と誠実について」 松原文

ヴォルフラムの『パルチヴァール』は、ハルトマンの『エーレク』と『イーウェイン』、ゴットフリートの『トリスタン』とならび、13世紀にドイツ語圏で花開いた宮廷文学の代表作品である。これらは12世紀後半に古伝語で書かれた作品を原典としており、騎士の戦いや恋愛を軸とする宮廷世界を描いている。ドイツの詩人たちが行ったのは原典の直接的な翻訳ではなく、独自の解釈を加えた翻案であった。たとえば、「誠実」(*triuwe*)をはじめとする騎士の美德を、具体的な物語の筋からすくい取り、概念として抽象化して取り上げる傾向が強いことが注目される。なかでも、ヴォルフラムの『パルチヴァール』は *triuwe* という語を250回以上と多用している。興味深いことに、原典であるクレチアン・ド・トロワの『ペルスヴァール』にはこの語に対応する記述がほとんど存在しない。

『パルチヴァール』のプロローグでは語り手が *triuwe* を作品のテーマだと言い、筋の上でも人物造形においても重要な要素となっている。しかし *triuwe* は実にさまざまな事象を表すため、その定義は容易ではない。ガーヴァーンを筆頭とする宮廷騎士が、戦いによって王や親族あるいは恋人に対する義務を遂行することが *triuwe* である。一方、本人の自覚しないところで生まれながら聖杯王に宿命づけられているパルチヴァールが、伯父とは知らぬ初対面の聖杯王を救済する問いかけ怠ったことも、*triuwe* の欠如と批判される。宮廷の尊厳や安寧を守るという目的に立つ社会的な「誠実」と、生来の力や高い品性といった共同体の関係性を超越した絶対的な特性としての「誠実」が同じ語で表されるのである。宮廷と聖杯城、さらには異教世界、と舞台が複雑に入り組む『パルチヴァ

ール』において、ヴォルフラムは宮廷を基盤とした既存の価値観にとらわれている読者をしばしば批判する。彼は当時のドイツの宮廷文学のキーワードである *triuwe* を大胆に拡張することにより、宮廷や騎士の理想の定型に挑戦したのである。

⑤「ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの「誠実」にみられる宗教性について」

伊藤亮平

本発表では、ヴァルターのリートに見られる「誠実」(*triuwe*)が宗教性を帯びているのか否かについて考察した。変わらぬ心で女性に「愛」(*minne*)を捧げるという「誠実」はミンネザングの中核概念である。特に盛期ミンネザングの世界では、男性は報われないにも拘らず、女性に奉仕し続けることが求められる。このような愛は「高きミンネ」(*hohe minne*)と呼ばれる。*triuwe* という語は1160~1170年代の初期ミンネザングでは散発的にしか用いられておらず、1170年代以降の盛期ミンネザングにおいて多用されていることから、*triuwe* と「高きミンネ」は深い関連性が認められる。

「高きミンネ」において、女性と結ばれる期待を抱きながら奉仕を続ける点は世俗的である。しかし、女性を神聖視し、「変わらぬ心」をもって女性に対して献身的に忠誠を尽くす様相は、*triuwe* の宗教的な側面を垣間見せていると言える。

ところがヴァルターは、盛期ミンネザングに属する歌人でありながら、女性を神聖視する「高きミンネ」に対して批判的な態度を示す。彼は、己の奉仕に対して返礼をする女性を賞讃する。ヴァルターは「変わらぬ心」という聖的なものより、女性との相互関係を求め、「契約を実行する」という世俗的な「誠実」を強調し、従来の「高きミンネ」に揺さぶりをかけたのである。

なお、ヴァルターはミンネザング以外にも、教会批判などキリスト教に関連の深いリートを数多く残している。しかし、これらのリート群では、「不誠実」がはびこり、「誠実」な人間が報われない世の中の現状を批判することに終始しており、

何が誠実かという点については全く言及していない。さらに、これまで自身が述べてきた女性へのミネを否定し、神の愛を希求する晩年のリートや、「十字軍の歌」、「マリア賛歌」では *triuwe* の用例は見られない。以上から、ヴァルターの *triuwe* は宗教性が希薄であり、彼は人間関係における世俗的な「誠実」を一貫して問題としていたと考えられる。

研究発表要旨

①「ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ『パルツィヴァール』中における他作品への言及箇所について」
青木三陽

②「頭韻詩『アーサーの死』とルナールの息子」
不破有理

頭韻詩『アーサーの死』（*Alliterative Morte Arthure*）は Thomas Malory の *Le Morte Darthur* の典拠として知られる作者不詳の作品で、制作年代や制作意図をめぐっては諸説が存在する。唯一残存する Thornton, Lincoln Cathedral MS.91 は、1430年頃に Robert Thornton によって転写された写本である。

頭韻詩『アーサーの死』には特異なエピソードが含まれているが、とりわけモードレッドに冠せられた *Malebranche* は本作品以外アーサー王物語には見られないエピソードである。本発表は *Malebranche* を手がかりに本作の典拠を辿り、*Malebranche* から連想される文学的コンテクストを探ることによって、本作の意図を読み直す試論である。

Malebranche については、Valerie Krishna は未発見の典拠の存在を推定する一方、Mary Hamel は14世紀のイングランド北部に流布していたニックネームから「悪い息子」の意味、またダンテの『地獄篇』に登場する悪魔の総称 *Malebranche* の転用の可能性を指摘している。Hamel のダンテ影響説は A.C. Spearing による否定的なコメントがあるのみで、以降ほとんど注目されていない。しかしながら、逸名作者がイタリアの政情に通じてい

たことや、ダンテの作品が14世紀には解説書を含め多数流布していたことを勘案すると、その影響の可能性は捨てきれないだろう。さらに『狐物語』あるいは『逆説狐物語』からの借用の可能性も指摘したい。『狐物語』にはルナールの息子マルブランシュが登場する。以前は『狐物語』自体はイングランドには伝わっていなかったとする説があったが、チョーサーの『カンタベリー物語』（*Nun's Priest Tale*）は『狐物語』の翻案作品であり、また『狐物語』の写本をフランス王が買い求めた記録も判明している。ダンテ自身が『狐物語』に触発された可能性など、依然様々な論を検討する余地はあるものの、14世紀イングランド北部で書かれた頭韻詩に、当時のヨーロッパ文学の人気作者ダンテと人気作品『狐物語』の残滓を読み取ることができるということは、あらためて14世紀英文学の汎ヨーロッパ的脈絡を考慮する重要性が確認されたといえるだろう。

③「『アーサーの死』と『狐物語』」

コメンテーター 福本直之

所謂『狐物語』と呼ばれる作品を簡潔に定義してみると、“ルナールと云う名前の悪狐を主人公にして中世フランス語で書かれた、作者も制作年代（12世紀後半～13世紀中葉）も異なる30数編の作品群”と云えます。物語の各篇は作者自身「枝篇」と名づけており、全作品に共通するのは、諸悪の根源と見なされている主人公ルナール以下さまざまな動物たちが擬人化されてライオンの王様の下で彼等の生きた時代、社会を写し出す動物叙事詩を形づくっている点であります。無名の作者達の文学知識は豊富で、ホメロス、黙示録にはじまりローランの歌、アーサー王物語からの引用も見られます。『狐物語』の大流行はフランスに留まらず、ドイツ、フランドルやイギリス、スカンジナビアにまで及んでおり、13世紀後半以降もルナールの名を冠した後代作品が続いております。全枝篇の中で、特にアーサー王作品との関連が注目されるのが第11枝篇（「皇帝ルナール」）であります。その枝篇は2部から構成され、前半部では多

くの先行枝篇のエピソードが散りばめられて、後半部で展開される主題、つまりルナール武勲詩への導入部となっております。本題である武勲詩は二つの合戦絵巻から成り、先ず最初に異教徒であるサラセン軍がらくだに率いられた象、虎、水牛、蛇等と共に侵冠するのをルナール達が撃退する話、続いてこの作品の本命であるルナールによる帝位篡奪が語られています。そこでアーサー王物語におけるアーサー王、モルドレ、グニエーヴルの関係がライオン王、王妃、ルナールに置き換えられて演じられています。第11枝篇の作者は『アーサー王の死』に見られる内容を意識的に裏返しにして用いているのが見られます。研究者によっては、そこに歴史的イベントとの関連性を指摘する向きもあるようです。

II. ヴェルツブルク国際大会報告

■ 会員数・会計報告

・国際会員総数は2013年度に1000名を超えていたが、2017年現在は841名。会費納入に基づき会員名簿を整理したことによる減少ではないかとの見解。
・支出の大半はDe GruyterへのThe Journal of the International Arthurian Society刊行・送付代金支払い。

■ 国際学会のWeb管理と書誌の電子化について

・業務を円滑化するため、国際学会委員会にdigital supervisor (s) の職を新設する。国際規約第4項の改定案が承認された。Dr Bonnie Millar (Nottingham)がその任にあたるのがAndrew Lynch 会長より伝えられた。

・今後、書誌をオンラインアクセス可能なデータベースへ移行する案が採択された。De Gruyterとの委託契約はあと1年とする。ただし、書誌情報の保存のために、the Centre for Arthurian Studies in BangorにArchiveとして毎年の書誌情報を紙媒体でも保存することが決定承認。

■ Vinaver Trust J. Taylor教授からの報告とお願い

・1981年に設立されたVinaver TrustはArthurian Literature in the Middle Ages Series など数々の優れたアーサー王研究の出版助成に活用されており、10か国の出版社、英仏独などの多言語で刊行され

アーサー王研究に広く貢献してきた。近年の低利率のため資金不足が予想されることから寄付のお願いがあった。振込先は以下の通り。問い合わせ
連絡先: the Director, Professor Jane Taylor
(jane.taylor@durham.ac.uk), or the Secretary, Dr
Geoffrey Bromiley (g.n.bromiley@durham.ac.uk).

Payment from outside UK banking system

(i) Donation to Publishing Fund (出版資金への寄付)
Payee Name/Name of account: 'Trustees of the Eugene
Vinaver Fund'

Sort code: 40 19 31

Account number: 01466410

Payee reference: your first name and surname, for
identification purposes

IBAN (International Bank Account Number):

GB31MIDL4019301466410

BIC (Branch Identifier Code): MIDLGB2114B

(ii) Donation to Research Fund, Barron Bequest (研究
資金への寄付)

Payee Name/Name of account: 'Trustees of the Eugene
Vinaver Fund: Research Support Fund'

Sort code: 40 19 31

Account number: 61728717

Payee reference: (your first name and surname, for
identification purposes)

■ 国際学会の新役員

President: Andrew Lynch

Vice-President : Danièle Hanes-Raoul

Secretary: Brigitte Burrichter

Treasurer: Isabelle Arseneau

Editor Database: Nathanael Busch

Editor JIAS: Leah Tether (deputy: Samantha Rayner)

Digital Supervisor(s): Dr Bonnie Millar (Nottingham)

■ 2020年第26回国際大会について

開催地: シシリア島カタニア (Catania in Sicily)

開催期間: 2020年7月20日 - 25日

大会テーマ:

1. Altérités arthuriennes / Arthurian Alterities / Arthurische 'Andersheit'.
2. Iconographies arthuriennes / Arthurian Iconographies / Arthurische Ikonographie
3. Redire, reprendre et répéter / Retelling, resumption,

repeating / Wiedererzählen, Wiederaufnahme, Wiederholung

4. Le paratexte dans les manuscrits arthuriens / Paratexts in Arthurian manuscripts / Paratexte in Artus-Handschriften

5. Les lieux de l'émotion arthurienne / Places of Arthurian emotion / Räume der Emotion im Artusroman

6. Médiévalisme / Medievalism / Mittelalterrezeption
(文責：不破有理)

■ 第25回国際大会参加者の寄稿文（五十音順）

「ヴェルツブルク随想」

小沼義雄

7月末にドイツのヴェルツブルクで開催された国際アーサー王学会に参加してきました。国際大会での発表は今回で四度目ですが、今から12年前、はじめてユトレヒト大会で発表した頃を思い出し、時の移り変わりを実感しました。当時、私はストラスブール大学で博士論文を準備しており、指導教授の故ミシェル・スタネスコ先生から「博士論文の一章くらいになるから発表してきなさい」と背中を押されたのが国際大会に参加したきっかけです。ユトレヒト大会の頃には、たとえば故エマニュエル・ボームガルトネル先生のようなベテランの先生方がご健在でした。この10年間で世代交代は進んでおり、年配の先生方が第一線から退く一方で、ユトレヒト大会の頃には大学院生だった同世代の研究者が研究・学会運営の両面で目覚ましい活躍をしていることに感嘆の念を禁じ得ません。日本支部所属の発表者については、ここ10年で顔ぶれに大きな変化はなく、若い世代の新規参入がないので発表者の減少・高齢化が緩やかに進行している先細り感を強く感じました。

今大会で私は「タンタジェルの馬上槍試合におけるゴーヴァンとメリアン・ド・リス：クレチアン・ド・トロワ『聖杯の物語』におけるセルフパロディー」と題した発表をしたのですが、博士論文でうまく論じられなかった問題を手直ししたものです。会場の最前列にはキース・バズビー先生が座っており、私の配付資料を見るなり「私の校

訂版を使ってくれて有り難う、フランス人は使わないんだよ！」と自虐ネタのようなことを仰いました。その他にもダニエル＝ジェームス・ラウル先生やアラン・コルベラリ先生などがおられました。ヴェルツブルクに来たのは彼らと親交を温めるためではなく、彼らを説得できなければ何の意味もないということは良く理解していました。私の発表が終わりそうな頃にクリスティーン・フェルランパン＝アシェ先生が会場に入ってきました。2008年にスタネスコ先生が急逝された後、フェルランパン＝アシェ先生には博士論文の指導を引き継いで頂いたという経緯がありました。これは私の勝手な想像ですが、先生は教え子の発表を聞くためではなく、発表の評判だけを確認めに顔を出したのだと思います。発表後、会場の建物を後にしようとする、フェルランパン＝アシェ先生が興奮した様子で私に声を掛け、これから皆で昼食に行こうと誘って下さいました。どうやら先生の同僚が私の発表を高く評価したのが嬉しかったらしく、発表を刊行することを勧められたり、こちらから日本での近況を報告したり、先生の最新刊である『ブルターニュのアルチェス』の校訂版のこととか、道すがら様々なことを語り合いました。スタネスコ先生の死後、フェルランパン＝アシェ先生には一方ならぬお世話になり、そのご恩はいつの日か研究でお返ししたいと思っていたので、先生の喜ぶ姿を見られたのがヴェルツブルクでの一番の収穫でした。

「第25回国際アーサー王学会「報告」」

佐佐木茂美

独・ウエルツブルク（2017/7/24-29）の日本人出席者は4名（不破、高名、小沼、佐佐木）であった。稿者は1975年（第11回・エクセター）以来の42年間、15回の「国際総会」にすべて参加、一該当者はいない、11回の口頭発表をしてきた。15回の〔総会〕（1975-2017）の俯瞰もそれなりの意味はあろう、と依頼を受けた。稿者にとり第12回レーゲスブルク（1978）、での最初の口頭発表（フロワサー論）、ユネスコの奨励金の対象と

なり、その秋に仏・リヨン大学に就職が決まり、仏「アーサー王学会」のメンバーが集まった印象的な一件があった。[独語圏学会の開催はまれて、それだけに日本からの専門家の不参加は残念、当地の主催者から丁重な挨拶を受け、遺憾の意を伝えた。今回、米代表より当時の拙稿（1981、トマ・ダングルテールとの比較研究）の請求を受けたり（「国際宮廷風文学会」での発表）、思い出を共有するアーサリアンとの出会いがあった。25日は会員一堂に会し、スペインが選に漏れて、壇上スクリーンに映されたアーサーの流謫の地モンジベッロ（シチリア島）、その背後になんと稿者の名、拙稿タイトルが現れた、「王の死、傷、医・魔術（再読の試論）（2015）」。伊・カタリニャが第26回（2020）開催地に決定した。[第19回（1996）、北伊・ガルダは、N.レーシー名誉会長が拙発表（『アルチュール王の死』）の司会者で、A. M.フィノーリ会長より、氏の『記念論文集』贈呈式への招聘を受けた。また、ポンペイの遺跡をE.ケネデイ氏（オックスホード）と同道、『国際叙事詩学会』のF.シュアール会長より、学会誌に寄せた佐藤輝夫氏の拙追悼文に対し謝意が示された。[イギリスは5カ所の開催地を提供してきて、エクセター（1975）総会—「王死せり」、ジャン・フラピエ前会長追悼の紙が貼られ、—新会長ウージェーヌ・ヴィナヴァ氏に講演後、聴衆の立ち去るのを待ってR・ギエットの高弟によって初参加の稿者が紹介された。（2006年、仏・中世語／文学界は20世紀後半の総決算を試み、日本人による貢献として「国際アーサー王学会」初代会長（日本支部）佐藤輝夫氏に、焦点をあてた。目下、氏のご出身の徳島県で展示会が開催されている（2017/11/10-2018/1/20））。

「ヴェルツブルクのアーサー王学会に参加して」
高名康文

到着して早々に、レセプションに参加した。国際学会への参加は久しぶりで、知り合いもおらず、不安な思いをしていたところ、会場責任者のB. Burrichter氏ら、ドイツ、オーストリアの先生方が、

私にあわせてフランス語でお話しをしてくれた。ヨーロッパの学会におけるもてなしとはこういうものかと感激し、見倣わなくてはならないと思った。

主に、写本研究・エディションに関するセッションと、中世のアーサー王文学のテーマ論に関するセッションに出席した。前者では、R. Trachsler氏のメルラン続伝の写本伝承に関する発表、D. de Carné氏とY. Greub氏の散文トリスタンの断片写本に関する発表、後者では、G. Toniutti氏のジャンル論、A. Berthelot氏のアーサー王物語の発展における円卓の変容に関する発表を特に感心しながら聞いた。Trachsler氏は、フランス語と英語のセッションでお見かけしたが、特に若い研究者の発表に建設的なアドバイスをなさっていた。

セミナー室は、25ほどの座席数だったため、セッションによっては立ち見がでた。目当ての部屋に行くとは既に満員ということもあり、そういう時には宿に帰って自分の発表原稿を見直した。

私の発表は、最終日に小沼義雄氏との日本人二人のセッションだった。お互いにパロディーを題目にしていたので、テーマから割り振っていたら偶然こうなったということだ。フランスで長く勉強をした小沼氏の発表を聞きにきた聴衆が、『新版ルナール』における運命女神と『アーサー王の死』に関しての私の発表にも残ってくれた。K. Busby氏とD. Kullmann氏にコメント、質問を頂き、新しく本部副会長になられたD. James-Raoul氏にもセッション後にコメントを頂いた。

本務校での仕事のため、発表の翌日の遠足にも参加せずに帰るという慌ただしさだったが、佐佐木茂美先生、不破有理先生とは、日本ではできないお話しもできた。ヴェルツブルクのワイン、ビールと共に、ソーセージもたくさん食べた。もっと多くの同胞が参加すればよかったのにとことだけが残念だった。

「第25回 Würzburg 大会の報告と国際大会発表のすゝめ」
不破有理

第25回 Würzburg 大会のテーマのひとつが

“Postmedieval Arthur: Print and Other Media”であったことに加え、ガイ・リッチ監督の『アーサー王』が公開されたこともあり、研究対象の座標軸を現代におく発表が目をつけた。プログラムの時間が筆者の発表と重なり参加できなかったが、Samantha Raynerらによるペンギン・シリーズのアーサー王物語の出版物を論じるRound Tableも開かれた。不破は昨年の支部大会で佐佐木茂美先生がご指摘くださった*Perceforest*におけるMalebrancheの論考を加え、頭韻詩『アーサーの死』の発表を行った。*Perceforest*校訂者の一人Jane Taylor教授やElizabeth Archibald教授から好意的な評価を頂けたことは大きな収穫であった。

本大会で特に印象に残った発表はEdward Kennedy教授による二つのユーモアあふれる発表である。ケネディ教授はMaloryの『アーサー王の死』における八行連詩『アーサーの死』などの英語作品の影響を指摘した先駆けである。マロリーはなぜフランス語の材源に頻繁に言及しているにもかかわらず英語の典拠には沈黙したのか。この問いに対して、教授はChaucerのSir Thopasの朗読で答えた。ガタピシと延々と続く音読に笑いが起こる中、自らの声で韻律の拙さ滑稽さを茶化しつつ、そのような卑俗な作品を参照したことをマロリーは伏せたかったに違いないというわけである。さらに、Retractionという研究における「前言撤回」をテーマとした、公開懺悔とでもいうセッションも秀逸だった。ケネディ教授は自論の修正を発表したにもかかわらず、修正前の論文を引用・批判され当惑したが「ちょうど自分の論文の書誌情報がCV用に必要だったので助かりました」とおっしゃる。ここでまた会場は爆笑。海外の発表ではユーモアが達人の極意で、そのような達人の話術はその場限り、その発表に聞き惚れることができるのは国際大会の醍醐味である。次回は2020年、イタリア、シシリア島での開催である。ぜひとも日本支部の会員の皆様、特に若手研究者には、国際大会のスリルと面白さを味わっていただきたいと願っている。

III. 電子化について

2016年度*Newsletter*および2016年度総会にてお知らせいたしましたように、日本支部では、会員の皆様への連絡やニューズレターなどの発行について、2018年2月をめどに、メーリングリスト等の電子媒体を活用する方向で準備を進めてまいりました。本件について、郵送での連絡・発送をご希望とのお知らせをいただいた会員には、今後も従来通りの方法で文書等をお送りいたします。まだご回答いただいていない場合は、至急庶務（新居：niiakiko@nufs.ac.jp）までご連絡くださいますようお願いいたします。

電子化につきまして、何とぞご理解を賜りますようお願い申し上げます。

IV. メーリングリストについて

2016年度*Newsletter*にて、メールマガジン導入の可能性についてお知らせいたしました。幹事会にて導入を見合わせる事が決定いたしました。したがいまして、現メーリングリストを従来どおり、支部会員間の情報交換のための場として、また事務局からのお知らせをお伝えする手段として活用してまいります。

V. 会計からのお願い

2018年度分（ならびにそれ以前の未納分の）会費の納入をお願い申し上げます。会費は同封の「払込取扱票」にてお支払いいただくか、下記口座に直接お振込みください。

〈郵便振替口座番号〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部
ゆうちょ銀行口座番号：00250-6-41865

〈ゆうちょ銀行以外の金融機関からの振込み〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部
金融機関：ゆうちょ銀行（コード：9900）
店名：〇二九（ゼロニキュウ）店（店番：029）
預金種目：当座
口座番号：0041865

年会費は3,000円です。また新入会員の入会時には入会金3,000円を頂いております。新規入会希望者をご推挙いただく際には、希望者にその旨お伝えくださいますようお願いいたします。

日本支部では、一口1,000円からの寄付金を随時募集しております。ご寄付いただけます場合、「寄付〇口」とお書き添えの上、同封の払込票をご利用のうえ年会費とともにお振込みいただくか、直接口座にお振込みください。皆さまの温かいご支援をお待ち申し上げます。（会計：田中一嘉）

【お知らせ】会費納入が5年連続して確認できなかった場合、退会扱いとさせていただきますのでご留意ください。（この手続きに関しましては、2016年度第1回幹事会にて確定されました。）

VI. 学会サイトについて

学会公式サイトでは、支部大会や国際大会のお知らせを掲載しております。

また、登場人物や作品を詳しく説明する「アーサー王伝説解説」コーナーも、引き続き更新中です。学会公式ツイッター (@inter_arthur_jp) でも随時情報の発信を行っております。写本や映画、新刊などを幅広く紹介しておりますので、ぜひご覧ください。

学会公式サイト

<http://arthuriana.jp/index.php>

学会公式ツイッター

https://twitter.com/inter_arthur_jp

(Web委員長：細川哲士)

VII. 2017年度年次大会について

2017年度年次大会は次の要領で開催されます。

(詳細は同封の大会資料をご覧ください。)

日時：2017年12月9日(土) 12:40 開会

会場：白百合女子大学

懇親会会場：学生ホール「フォンス・ヴィーテ」

VIII. 研究発表・シンポジウム企画募集

日本支部では随時、支部大会での研究発表・シ

ンポジウム企画を募集しております。ご希望・ご提案がございましたら庶務までお寄せください。シンポジウム企画は7月末、研究発表は同年8月末を締切とし、時期に従って当該年度または次年度の大会に組み入れて参ります。

IX. 会員名簿に関するお願い

ご連絡先等の名簿記載事項に変更があった場合は、速やかに庶務までお知らせください。ただし実際に会員に配布される会員名簿に関しては、個人情報保護の観点からそれぞれの事項(所属・住所・電話/ファックス番号・メールアドレス)を掲載中止にすることも可能です。ご希望がございましたら庶務までお申し出ください。

X. 文献情報

ここには、当学会会員であるか否かに関わらず、国内で出版されたものを中心に西洋中世文学関連の刊行物を紹介しています。

英文学 (書誌担当：新居明子)

<研究(単行本)>

『ケルト文化事典』(木村正俊、松村賢一編)、東京堂出版、2017年。

不破有理『アーサー王伝説—19世紀初期物語集成 (The Morte Darthur: A Collection of Early-Nineteenth-Century Editions) 別冊解説』、エディション・シナプス、2017年。

※"Reprinting Malory: Walker, Wilks, and Southey" (pp.3-46)、「アーサー王物語の集大成: サー・トマス・マロリーの『アーサー王の死』(Sir Thomas Malory, *Morte Darthur*, 1485年)「Walker版(1816年)、Wilks版(1816年)、Southey版(1817年)の復刻によせて」(pp.51-101.)を含む。

※マロリー『アーサー王の死』復刻版(全7巻)の別冊解説編では、Caxton版をめぐるRobert SoutheyとWalter Scottの駆け引き、さらに1816年版のWalker版がWilks版に印

- 刷・出版・販売競争で勝ったのは、判型の差異による印刷日数の短縮、さらに出版界の巧妙な読者拡大戦略に即した「書物」の特徴にあることを指摘し、小型ポケット版の出版がアーサー王伝説の一般読者誕生に寄与したことを示した。(執筆による要旨)
- C・スコット・リトルトン、リンダ・A・マルカー『アーサー王伝説の起源—スキタイからキャメロットへ(新装版)』(辺見葉子、吉田瑞穂訳)、青土社、2017年。
- <研究(雑誌・紀要論文等)>
- 秋篠憲一「マロリーによる頭韻詩『アーサーの死』の翻案とキャクストンの改訂」、『主流』(同志社大学英文学会)、第77号、2015年、pp.1-20.
- Taro ISHIGURO (石黒太郎) “The Doors of Janus in the Old English Orosius,” *The Journal of Humanities* (Meiji University), 22, 2016, pp.19-27.
- Taro ISHIGURO (石黒太郎) “Orosius in the Old English Bede,” *The Bulletin of Arts and Sciences*, (Meiji University), 512, 2016, pp.139-147.
- Taro ISHIGURO (石黒太郎) “Parentheses in the Old English Andreas,” *The Bulletin of Arts and Sciences* (Meiji University), 518, 2016, pp.123-138.
- Taro ISHIGURO (石黒太郎) “The Clause-Initial nu in the Old English Andreas,” *Papers from the Conference and from the International Spring Forum of the English Linguistic Society of Japan*, 34, 2017, pp.43-48, 2017
- Yu ONUMA (大沼由布) “Convention Through Innovation: Marvels in *Topographia Hibernica* by Gerald of Wales,” *Aspetti del meraviglioso nelle letterature medievali. Aspects du merveilleux dans les littératures médiévales*, ed. Franca Ela Consolino, Francesco Marzella and Lucilla Spetia, Turnhout: Brepols, 2016, pp.69-80.
- Hiroshi OGAWA (小川浩) “Three Syntactical Notes on the *Catholic Homilies*,” *Studies in Medieval English Language and Literature* (The Japan Society for Medieval English Studies), 31, 2016, pp.19-32.
- Michiko OGURA (小倉美知子) “Stylistic Devices for Introducing Direct Speech in Old English Poetry,” *Studies in Medieval English Language and Literature* (The Japan Society for Medieval English Studies), 31, 2016, pp.1-18.
- Patrick P. O’NEILL “Miscellaneous Notes on the Old English Prose and Metrical Psalms in the Paris Psalter,” *Bulletin of the Institute of Oriental and Occidental studies, Kansai University*, 49, 2016, pp.231-245.
- Patrick P. O’NEILL “The unidentified ‘Wlonchargan’ of the Middle English poem *Sarmun* in British Library, MS Harley 913,” *Bulletin of the Institute of Oriental and Occidental studies, Kansai University*, 50, 2017, pp.61-68.
- 片見彰夫「中英語神秘主義散文における魂と身体 of the 言語表現」、『青山スタンダード論集』(青山学院大学青山スタンダード教育機構)、第12号、2017年、pp.171-205.
- Kazutomo KARASAWA, Kazutaka FUKUDA “John Trevisa’s Middle English Translation of Ranulph Higden’s *Polychronicon* Based on Senshu University Library, MS 1-A Diplomatic Edition (6),” *Journal of the Faculty of Letters, Komazawa University*, 75, 2017, pp.29-89.
- 久木田直江「イギリス中世末の教会改革とハッケボーンのメヒティルドの靈性」、『ヨーロッパ文化の再生と革新』(甚野尚志・益田朋幸編)、知泉書館、2016年、pp.173-196.
- 小林美樹「Maloryにおける文頭要素と倒置・非倒置語順に関する考察」、『神田外語大学紀要』、第27号、2015年、pp.1-22.
- 島崎里子「Ælfricの既婚聖人伝に見る女性像—*Chrysanthus and Daria*をめぐって」、『昭和女子大学女性文化研究所紀要』、第44号、2017年、pp.1-21.
- 玉川明日美「*The Reeve’s Tale*と北部方言」、『*Studies in Medieval English Language and Literature*』(日本中世英語英文学会)、第31号、2016年、pp.33-52.

小林茂之「中英語頭韻韻文における動詞先頭語順について」、『聖学院大学論叢』、第 28 巻 (第 1 号)、2015 年、pp.77-94.

新居明子「物語の力—『アーサー王ここに眠る』における「虚構」と「真実」」、『名古屋外国語大学論集』、第 1 号、2017 年、pp.25-43.

長谷川千春「サー・トマス・マロリー「ガレスの物語」における騎士になることの意味」、『大東文化大学紀要 人文科学』、第 55 号、2017 年、pp.77-89.

不破有理「Does Format Matter?—トマス・マロリー『アーサー王の死』1816 年版 Walker edition の判型を解説する」、『慶應義塾大学日吉紀要英語英米文学』、第 68 号、2016 年、pp.1-24.

※1816 年の Walker 版と Wilks 版は 19 世紀以降のアーサー王伝説復興に多大な影響を与え、「マロリー学」誕生への道を拓いたトマス・マロリー『アーサー王の死』のテキストである。本稿では実験書誌学による Walker 版の校合と印刷時の痕跡の照合結果、Walker 版の判型は「ハーフ・シート 24 折本」と特定、判型の差異が両版の出版競争の勝因の一つとなりうることを示した。(執筆者による要旨)

牧野有通「この世の神々と貧乏白人—アーサー王の世界から—九世紀アメリカへ」、『マーク・トウェイン研究と批評』(南雲堂)、第 16 号、2017 年、pp.77-89.

松下知紀「中世英文学に影響を及ぼしたイタリア・ルネッサンス」、『専修人文論集』、第 99 号、2016 年、pp.287-305.

Yoko WADA (和田葉子) “The Poem *Nego* of London, British Library, MS Harley 913, as a Satire on Medieval Disputes Concerning Philosophy and Theology,” *Bulletin of the Institute of Oriental and Occidental studies, Kansai University*, 49, 2016, pp.207-216.

Yoko WADA (和田葉子) “‘Seue yere in swineis dritte’: a Penance in a Middle English Satirical Poem, *The Land of Cokaygne*, in London, British Library, MS Harley 913,” *Bulletin of the Institute*

of Oriental and Occidental studies, Kansai University, 50, 2017, pp.51-60.

<研究書の翻訳>

マーティン・J・ドハティ『図説アーサー王と円卓の騎士—その歴史と伝説』(伊藤はるみ訳)、原書房、2017 年.

<監修>

『よみがえる中世—中世主義 ロマン派〜ヴィクトリア朝文献復刻シリーズ』(第 1 回配本『アーサー王伝説—19 世紀初期物語集成』(高宮利行シリーズ監修、高橋勇シリーズ編集)、エディション・シナプス、2017 年.

<書評>

Tadashi KOTAKE (小竹直) “Mary Clayton, ed. and trans., *Two Ælfric Texts: The Twelve Abuses and The Vices and Virtues: An Edition and Translation of Ælfric’s Old English Versions of De duodecim abusivis and De octo vitiis et de duodecim abusivis* (Anglo-Saxon Texts 11) (Cambridge: D.S. Brewer, 2013),” *Studies in Medieval English Language and Literature*, (The Japan Society for Medieval English Studies), 31, 2016, pp.63-73.

玉川明日美「Kiyooki Kikuchi, *Studies in Medieval English Language and Literature II : The Sound of Literature: Aspects of Language and Style in The Owl and the Nightingale*」、『英米文学』(立教大学文学部英米文学専修)、第 77 号、2017 年、pp.25-29.

Yasuyo MORIYA (守屋靖代) “Judith A. Jefferson and Ad Putter (eds.) with the assistance of Amanda Hopkins, *Multilingualism in Medieval Britain (c. 1066-1520): Sources and Analysis*, Turnhout: Brepols, 2013, xxiv+292pp,” *Studies in English literature* (The English Literary Society of Japan), 57, 2016, pp.155-161.

Tomonori YAMAMOTO (山本伍紀) “Gabriele Diewald, Leena Kahlas-Tarkka, and Ilse Wischer, eds. *Comparative Studies in Early Germanic Languages: With a Focus on Verbal Categories*

(Studies in Language Companion Series 138)
(Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 2013),”
Studies in Medieval English Language and Literature (The Japan Society for Medieval English Studies), 31, 2016, pp.75-82.

Hideki WATANABE (渡辺秀樹) “J. R. R. Tolkien, *Beowulf: A Translation And Commentary together with Sellic Spell*. Edited by Christopher Tolkien (London: HarperCollins, 2014),” *Studies in Medieval English Language and Literature* (The Japan Society for Medieval English Studies), 31, 2016, pp.53-62.

独文学 (書誌担当: 伊藤亮平)

<研究 (単行本) >

田中一嘉「情熱とイデオロギーの相克—アイルハルト版「トリスタン物語」における「死に至る恋愛」の特質」、成蹊大学文学部学会編 (田中一嘉 責任編集) 『文化現象としての恋愛とイデオロギー』 (成蹊大学人文叢書 14)、風間書房、2017年、pp.147-186.

<研究 (雑誌・研究紀要等) >

石川栄作「ニーベルンゲン伝説におけるブリュンヒルデ像の変遷」、『言語文化研究』 (徳島大学総合科学部)、第24号、2016年、pp.39-74.

伊藤亮平「ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデのリートにおける triuwe」、渡邊徳明編『聖と俗の foi & triuwe—中世の宮廷文学における「誠実」・「忠誠」・「信心」』 (日本独文学会研究叢書 127)、2017年、pp.67-78.

Yoshiki KODA (香田芳樹) “Nihilismus und Utopismus : Die Reichweite der antiken und mittelalterlichen Endzeitmythologie in das Denken des 20. Jahrhunderts”, 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』、第47号、2016年、pp.33-47.

嶋崎啓「triuweの語義について」、渡邊徳明編『聖と俗の foi & triuwe—中世の宮廷文学にお

ける「誠実」・「忠誠」・「信心」』 (日本独文学会研究叢書 127)、2017年、pp.6-16.

田中一嘉「ゴットフリートの『トリスタン』における策謀の力学 (1) —トリスタンのアイデンティティ獲得と宮廷の陰謀」、『成蹊大学文学部紀要』、第51号、2016年、pp.193-214.

寺田龍男「多文化理解論の実践—東西後朝考」、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』、第127号、2016年、pp.1-8.

中林練「中高ドイツ語宮廷長編物語に表現された「感情」と「規範」—ゴットフリートの『トリスタン』における minne と ere を例に」、『藝文研究』 (慶應義塾大学芸文学会)、112号、2017年、pp.203-215.

浜野明大「古ドイツ語コーパスの課題と発展—古高ドイツ語 truhtin を巡って」、『日本大学文理学部研究紀要』、第93号、2017年、pp.98-104.

松原文「アーサー王物語における triuwe —『パルチヴァール』と『イーヴァイン』をクレティアンの原典と比較して」、渡邊徳明編『聖と俗の foi & triuwe—中世の宮廷文学における「誠実」・「忠誠」・「信心」』 (日本独文学会研究叢書 127)、2017年、pp.50-66.

山本潤「英雄たちの黄昏—『ニーベルンゲンの歌』および『ニーベルンゲンの哀歌』に見る英雄性への視線」、『人文学報 ドイツ語圏文化論』 (首都大学東京人文科学研究科)、第513-14号、2017年、pp.49-66.

渡邊徳明「1200年代初頭のドイツ宮廷文学における愛の原動力—ミンネ (愛) の物質性と精神性をめぐって」、『東北ドイツ文学研究』 (日本独文学会東北支部)、第57号、2016年、pp.1-21.

渡邊徳明「カール大帝の妃に対する不倫疑惑の物語」、中央大学人文科学研究所編『続 英雄詩とは何か』 (中央大学人文科学研究所研究叢書 64)、中央大学出版部、2017年、pp.233-265.

渡邊徳明「ゲネレンとクリエムヒルトの誠実なる裏切り—彼らの悪魔的異形性をめぐって」、渡邊徳明編『聖と俗の foi & triuwe—中世の宮廷文学における「誠実」・「忠誠」・「信心」』（日本独文学会研究叢書 127）、2017年、pp.17-32.

<原典の翻訳>

『ニーベルンゲンの歌』（岡崎忠弘訳）、鳥影社、2017年.

<研究書の翻訳>

ヴァインホルト/エーリスマン/モーザー 『中高ドイツ語小文法 改訂第18版』（井出万秀訳）、郁文堂、2017年.

クラウディア・プリンカー・フォン・デア・ハイデ 『写本の文化誌—ヨーロッパ中世の文学とメディア』（一條麻美子訳）、白水社、2017年.

<書評>

寺田龍男「岡崎忠弘（訳）『ニーベルンゲンの歌』、鳥影社、2017年」、『図書新聞』、第3316号（2017年8月19日）、p.5.

北欧文学（書誌担当：伊藤亮平）

<研究（単行本）>

下宮忠雄『エッダとサガの言語への案内—序説、文法、テキスト・訳注、語彙』、近代文藝社、2017年.

仏文学（書誌担当：高名康文）

<研究（単行本）>

小川直之『失われた写本を求めて—中世フランスと中東における文学写本の世界』、翰林書房、2016年12月、246p.

篠田知和基『世界神話入門』、勉誠出版、2017年5月、273p.

<研究（雑誌・紀要論文等）>

瀬戸直彦「「トルバドゥールの師匠」ジラウト・デ・ボルネーユの黙説法（作品45）」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、第62輯、2017年3月、pp.171-189.

Naohiko SETO（瀬戸直彦）、「*«Bela domna ab fresca color» : misogynie occitane dans le Secret des Secrets* », in eds. A. Carrera e I. Grifoll, *Occitània en Catalonha : de tempes novèls, de novèlas perspectives, Actes de l'XI^{en} Congrès de l'Association Internacionala d'Estudis Occitas (2014 : Lleida, Catalunya)*, Generalitat de Catalonha : Departament de la Cultura, 2017, pp.649-659.

高名康文「リュトブフの仮構された「私」によるパリ」、『仏語仏文学研究』（東京大学仏語仏文学研究会）、第49号、2016年10月、pp.23-37.

高名康文「ルナールと托鉢修道会—リュトブフ、『ルナールの戴冠』、『新版ルナール』」、『西洋中世研究』（西洋中世学会）、第8号、2016年12月、pp.174-193.

高名康文「『ロランの歌』における「誠実」と「不誠実」」、渡邊徳明編『聖と俗の foi & triuwe—中世の宮廷文学における「誠実」・「忠誠」・「信心」』（日本独文学会研究叢書 127）、2017年9月、pp.33-49.

Takeshi MATSUMURA（松村剛）、「*Girart de Roussillon dans Le Crime de Sylvestre Bonnard* », *FRACAS*, 48, décembre 2016, pp.1-5.

Takeshi MATSUMURA（松村剛）、「*À propos d'un nouveau dictionnaire du français médiéval* », in *Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Comptes rendus des séances de l'année 2016 janvier-mars, décembre 2016*, pp.499-503.

村山いくみ「『寓意オウィディウス』写本の伝承過程にみる古代異教の物語の受容」、『西洋中世研究』（西洋中世学会）、第8号、2016年12月、pp.194-207.

渡邊浩司「ログル王国の乙女たちによる3日間の断食（クレティアン・ド・トロワ『荷車の騎士』3530-37行）—インド=ヨーロッパ神話

の3つ首怪物の記憶」、『人文研紀要』（中央大学）、第84号、2016年9月、pp.113-146。
渡邊浩司「フラシウス—アイルランド神話の王権女神」、篠田知和基編『神話・象徴・儀礼 III』、樂瑯書院、2016年12月、pp.89-92。
渡邊浩司「3本目の剣を祖国に残すメリヤドゥック—13世紀古フランス語韻文物語『双剣の騎士』を読む」、中央大学人文科学研究部編『続 英雄詩とは何か』、中央大学出版部、2017年3月、pp.197-232。
渡邊浩司「フランス・アルプス地方の人狼伝承」、石井正己編『現代に生きる妖怪たち』、三弥井書店、2017年7月、pp.136-152。
横山安由美「王の擬制的身体と円卓—〈王の歴史〉からの離昇としての聖杯物語」、『仏語仏文学研究』（東京大学仏語仏文学研究会）、第49号、2016年10月、pp.7-22。

<原典の校訂版、および原典の翻訳>

『パリの住人の日記 II—1419-1429』（堀越孝一 訳・校注）、八坂書房、2016年10月、472 p.

<研究書の翻訳>

リシャール・トラクスラー「ヨーロッパにおけるアーサー王文学の誕生—ジェフリー・オヴ・モンマスからクレティアン・ド・トロワまで」（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）、『中央評論』（中央大学）、第297号、2016年11月、pp.166-173。

リシャール・トラクスラー「余剰な1本の剣—中世フランス語韻文物語『双剣の騎士』をめぐる」（渡邊浩司訳）、『仏語仏文学研究』（中央大学）、第49号、2017年2月、pp.85-120。

ジャン＝シャルル・ベルテ「中世ラテン語散文物語『カンブリア王メリアドクスの物語』」（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）、『中央評論』（中央大学）、第299号、2017年5月、pp.227-236。

<書評>

Hitoshi OGURISU（小栗栖等）、「Ma[r]jorie Moffat, *The Châteauroux version of the « Chanson de Roland »* (Beihefte zur Zeitschrift für romanische Philologie, 384), Berlin/Boston, De Gruyter, 2014, 625 p. », *Zeitschrift für romanische Philologie*, 132(3) (2016), pp.824-855.

原野昇「Takeshi MATSUMURA (sous la direction de Michel ZINK). *Dictionnaire du français médiéval*, Paris, Les Belles-Lettres, 2015, 3501 p. €85.00.」、『西洋中世研究』（西洋中世学会）、第8号、2016年12月、pp.275-276。

渡邊浩司「フィリップ・ヴァルテール『私の鷺鳥おばさん—妖精民話における神話とフォークロア』」、『中央評論』（中央大学）、第299号、2017年5月、pp.305-308。

中世ラテン語文学・伊文学・西文学（書誌担当：高名康文）

<研究（単行本）>

伊藤亜紀『青を着る人びと』、東信堂、2016年11月、224 p.

<研究（雑誌・紀要論文等）>

大黒俊二「声のゆくえ—15世紀イタリアの筆録説教から」、『思想』、第1111号、2016年11月、pp.65-79。

大黒俊二「書体から見る「中世とルネサンス」」、南塚真吾・秋田茂・高澤紀恵編『新しく学ぶ西洋の歴史—アジアから考える』、ミネルヴァ書房、2016年2月、pp.24-26。

Yoshinori OGAWA（小川佳章）、「Chistes anticlericales en *El Conde Lucanor*», in eds. Aurelio González et al., *Perpectivas y proyecciones de la literatura medieval*, México : El Colegio de México - Universidad Autónoma Metropolitana, 2017, pp.539-549.

瀧本佳容子「フアン2世治世下（1406-54）におけるカステイーリャ詩の理論化」、『慶應義塾

大学日吉紀要 人文科学』、第 31 号、2016 年 5
月、pp.103-123.

<原典の翻訳>

『中世、ロワール川のほとりで聖者たちと。』

(宮松浩典訳)、九州大学出版会、2017 年 2
月、340+xvi p.

※中世のロワール川流域で活躍した、アンジェの
町とゆかりのある 7 名の聖人の聖人伝の翻訳。

編集・発行

国際アーサー王学会日本支部事務局

〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57

名古屋外国語大学 外国語学部

新居明子 研究室内

Email: niiakiko@nufs.ac.jp

メンバーリスト : members@ml.arthuriana.jp

学会ウェブサイト : <http://www.arthuriana.jp/index.php>